



オオクワガタ飼育方法

カブトムシより人気があるオオクワガタ。かつては「黒いダイヤ」と呼ばれ数万～数十万円の価格がついたこともありましたが、現在は養殖技術の確立により安価で入手できるようになりました。成虫で複数年(平均3～5年)生きるので、長期飼育に向いているだけでなく、産卵させて増やすこともできます。

筆者の経験に基づいていますので、この飼育マニュアル通りに飼育して失敗しても当方で責任は一切ないものとさせていただきます。

■ 入手方法

一般的には 1. 野外採集する、2. 購入する、3. 譲って貰うの3つです。

1. 野外採集

全国的に数が少なく、臆病な性格で滅多に人前に姿を現さないのが、初心者が野外で見つけるのは非常に困難です。また、有名採集地では採集者が多く、現在は絶滅寸前にまで激減しているところもありますので、あまりおすすめできません。

2. 購入する

購入については、現在は養殖されたものが大量に流通しているため、数千円～1万円前後で買うことができます。購入する時のポイントとして、

- ✓ 脚が切れていたり、マヒしていないか
- ✓ 産地が記載されているか
- ✓ 羽化して4～6か月以上経っているか
- ✓ 体に傷がついていたり弱っていないか

以上の点に気をつけて選びましょう。

3. 譲って貰う

友人または知人がブリードしている場合、余っている個体を無償で分けてくれる場合があります。ただし、ブリーダーは繁殖可能な種親を手元に残しておくため、一部を除いて分けて貰えるのは新成虫のことが多いので、羽化日を聞いておき、すぐに繁殖可能か判断しましょう。羽化して4～6か月未満の場合は当年中の繁殖は諦めて翌年の春以降にしましょう。

■ ペアリング

お店で買ってきたもしくはブリーダーから譲って貰った成虫は未交尾がほとんどですので、まずは交尾させましょう。ただし、羽化してから6か月以上経過していないと、交尾産卵させることはできません。

➤ 用意するもの

1. プラケース
2. コバエ防止シートか穴あきビニール
3. 飼育マット
4. 餌台
5. 餌ゼリー(リンゴやバナナ、ヨーグルト、カルピスの原液もよい)
6. 産卵木

これらの用品は専門店で揃えることができます。



ペアリングセットの一例。マットはハムスター用の針葉樹パインチップを使用しているが、コバエが湧きにくいので成虫飼育にはお勧め。ただし、2週間に一度は交換する必要がある。

プラケース小以上のサイズに薄くマットを敷き、餌台と餌ゼリーをセットしてから成虫を入れます。1週間～10日したら交尾しているので、メスを取り出して産卵セットへ移します。

ただし、**野外で採集したメスはほとんどが交尾済**なので、ペアリングは不要ですが、採集した翌年以降はペアリングさせた方が良い結果が得られることが多いです。同産地でオスを採集したか、ブリード個体を所有している場合に限られます。

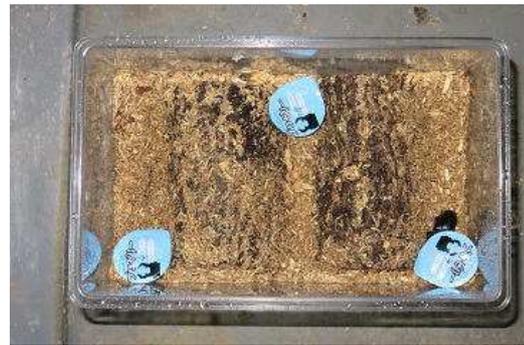
■ 産卵セット

産卵セットは以下の手順で作ります。

1. 直径8～10cm程度の産卵木を半日程度水に浸けます。
2. 加水した産卵木を水切りします。
3. 鉋などで樹皮を剥ぎます(剥いだ樹皮は捨てないで取っておきましょう)。
4. ケース底にクヌギマットを5～10cm程度堅めに詰めます。
5. 産卵木をセットし、クヌギマットで2/3程度埋めます。
6. 餌ゼリーをセットし、交尾済の♀をセット内に放します。



大きめのバケツなら、材2本程度は入る。水がこぼれない程度にいっぱい入れよう。



産卵セットの一例。樹皮を半分だけ残し、剥いた方を埋めると、残した側の樹皮が転倒防止材代わりになるが、初心者にはできるだけ全部剥いてから再利用の方がいい。

■ 幼虫の取り出し

セットしてから1か月半～2か月经ったら割り出します。この頃になると、遅くに産みつけられた卵も孵化しているので、できれば幼虫になってから取り出した方がいいです。



産卵によってぼろぼろになった産卵木。



マイナスドライバー等で割って食痕が出ていれば、ほぼ成功とみていい。



産卵木から出てきた幼虫。



割った材の破片をミキサーで砕くか、クヌギマットをプリンカップに詰めて、食痕と一緒に幼虫を移す。

プリンカップにクヌギマット等を詰めて幼虫を食痕と一緒に移しておくと、2週間～1か月程度は大丈夫なので、その間に菌糸ビン等を用意しましょう。

取り出したメス親は休ませておきましょう。産卵で体力を消耗しているので、肉食傾向が強くなります。他の虫を食べることがあるため、単独飼育とし、高蛋白ゼリーを与えましょう。

■ 幼虫飼育

幼虫飼育は 1. 菌床飼育、2. マット飼育、3. 材飼育がありますが、最初は菌床飼育からおすすめします。

➤ 菌床飼育

オガ屑にキノコの菌を植えたもので、オオクワガタの幼虫はオガ屑と一緒にキノコの菌も食べることで大きくなります。70mm オーバーの大型成虫を誰でも簡単に作出することができるようになったのも、菌糸ビンの功績が大きいです。



菌糸瓶に投入した初齢幼虫。できればそれまで育てていたマットを糞などと一緒に入れておくとよい。

小さいうちは雌雄判別が困難なので、最初は 800 cc 程度の瓶に入れておくといい。



白い部分が半分以上なくなったか、変色し始めたら劣化のサインなので、早めに新しい菌糸ビンへ交換しよう。蓋を取ると、上部にキノコが発生している場合がある。

最初は 800 cc のビンに投入し、3 か月を目安に交換します。交換した後の古い菌糸カスはカブトムシの幼虫の餌として再利用できますので、できれば捨てないでおきましょう。カブトムシも一緒に飼育しておくと、ゴミの減量にもつながり、地球にやさしくなります。

最初の菌糸ビン交換時、♂は 1400 cc、♀は 800 cc を目安にしましょう。羽化するまでに 2～3 回の交換が必要です。



菌床飼育の欠点は、お金がかかります。1本あたりの単価は最低でも300～700円で、交換時にまとまった数を購入するとバカになりません。菌糸ブロックを購入し、自分で空き瓶などに詰めた方が安上がりです。

ただし、ブロックを崩して詰めた場合、菌糸が切断されているので、再生するまで最低1週間は待ちましょう。

十分に成長し、部屋のようなものを作り出したら、蛹になる合図ですので、もう瓶を動かしたりしてはいけません。成虫になるまで待ちましょう。



蛹室内で羽化した♀(左)と菌糸瓶から取り出した♂(右)。体が固まっていないうちに取り出すと傷ついて死んでしまうことがあるので、羽化してから2週間ぐらい待とう。

▶ マット飼育

発酵マットで幼虫を育てる飼育方法です。昔から用いられてきましたが、朽ち木を破碎しただけの“クヌギマット”では大型成虫を羽化させることは困難でした。現在は添加剤により発酵させることで幼虫が消化吸収しやすくすることで、大型成虫を羽化させることができました。



飼育方法は菌床飼育とほとんど同じですが、菌糸瓶と違って交換のサインが分かりづらいので、いつ投入し、交換したかデータラベルを付けて日付を記録し、3か月を目安にしてください。

交換する時は全て新しいマットにするのではなく、2/3程度容器内に入れてから残りは古いマットを入れてください。古いマット中には幼虫の糞中からバクテリアが拡散されており、引継ぎことで新しい餌になじみやすくなります。

菌床飼育と違い、成長が遅くなり、羽化まで2年かかることもあります。

自分でマットに小麦粉等の添加剤と水を加えて発酵させることで、オリジナルマットを作ること
もでき、費用面も菌床飼育に比べて安価です。作り方は専門書を参考にしてください。

➤ 材飼育

大きめの産卵材に幼虫を入れて育てる飼育方法です。最も自然に近い飼育方法ですが、
材を割らない限り、生死が分からないのと、羽化まで2年かかることがあり、大型成虫を作出
するのは困難です。



ドリルで穴をあけ、幼虫を入れます。最初に投入する時、1 齢後期～2 齢初期の段階で直径 12mm 程度なら入ります。



食痕や糞で穴を塞ぎます。糞中のバクテリアを材へ引き継ぐことにより、幼虫が材を餌として受け入れやすくなります。



水分の蒸発を防ぐため、切り口にビニールで蓋をします。菌糸やマットと違い、材は半年～最大1年持ちますので、材交換回数をできるだけ減らし、幼虫に交換時のストレスを与えないことがポイントになります。

材飼育は一般的にシイタケの廃ホダ木が使われます。大型個体を作成するのが困難ですが、羽化した成虫の体型は格好がよいとされています。

カワラタケを植菌した材も販売されていますので、これらの材を使えば大型個体作出に期待できますが、高価なので数を扱うと費用がかかるのが難点です。

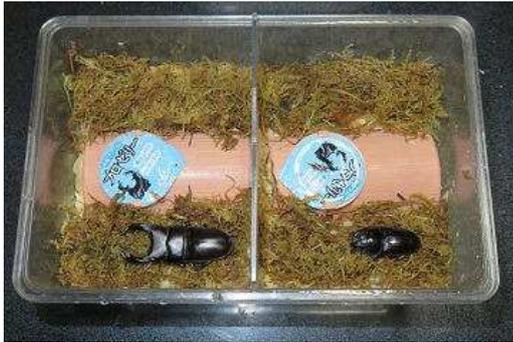
筆者は過去に材飼育で最大 65mm の個体を作成した実績がありますが、2 年 1 化に引っ張ってできるだけ大きく育てるかがポイントになってきます。

菌床飼育とマット飼育に慣れたら、何頭かを材飼育にしてみるのもよいでしょう。場所を取るのも難点ですので、最初に 4～5 頭程度を材飼育対象とし、残りは菌床もしくはマットで育て

る等、無理のない範囲内でやるのがおすすめです。

■ 新成虫管理

羽化して2週間以上経ったら成虫を取り出します。羽化した新成虫は幼虫の時に蓄えた養分が残っているため、餌は食べません。餌を食べ始めるのは3か月後ぐらいからです。交尾・産卵は羽化後、最低でも6か月経過しないとできないので、羽化時期にもよりますが翌年の春まで待った方がいいです。水分を切らさないように管理することが大切で、11月ぐらいまでは湿らせた水苔と樹皮などの転倒防止材をケースに入れておきます。



仕切り付きケースでの一例。越冬中の乾燥防止のため、マットの上に水苔を敷き詰めている。

羽化して6か月未満の新成虫は個別のケースで管理するのがベター。

当年中に羽化した新成虫は個別管理が基本で、1つのケースに1匹ずつとしてください。決して複数匹を同居させてはいけません。

11月(遅くても12月)から翌年4月までは家の中で最も寒く、温度変化の少ないところ(玄関、トイレ等)や軒下、北側のバルコニー等においてください。寒くなりすぎないようにマットを厚く敷き詰め、定期的に霧吹きで水分補給して乾燥しないように注意してください。

翌年3~4月になって気温が上がったら、餌ゼリーを交換し、時々は減り具合を見てください。ペアリングはGWぐらいから可能です。